

沼津市 志 山 小 記 念 館

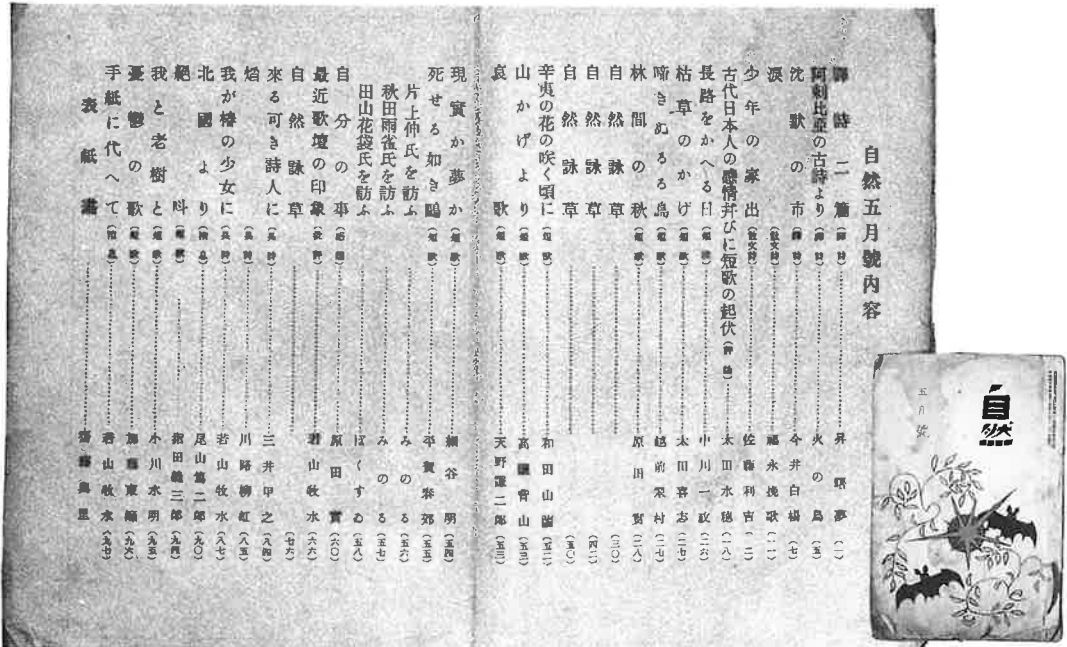
第四號

1990.4.1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷1907-11

TEL (0559)62-0424



雑誌「自然」第一号

雑誌「自然」は若山牧水が明治四五年五月に創刊し、一号だけで廃刊になった詩歌の総合雑誌である。菊版本文百ページで、表紙は斎藤与里が書き、内容は、昇曙夢の訳詩、太田水穂の評論、川路柳虹の長詩、中川一政の短歌などかなり広い範囲にわたっている。

「自然」創刊の背後には、それまで東雲堂書店から発行していた牧水編集の「創作」が突然廃刊になった事実がある。明治四三年三月には、はなばなしく創刊された「創作」は、比較的順調に運営されていたようにみえた。だが、四四年一〇月に至り二〇号をもって終刊号を出し、同時に創作社も解散している。その原因はよく分らないが、「編集に不満な東雲堂から改革案なるものが出されていた」とする大悟法利雄氏の記録がある。発行所の西村陽吉の側からいえば、寄稿家の顔ぶれが一部部に偏ってしまい、次第に結社雑誌のような形態に陥りつつある実状に、あきたりなくなつたということもあろう。結局「創作」は廃刊と同時に、北原白秋に編集が委託され、高踏的新雑誌「朱燧」が創刊されるのである。

創作社を解散した牧水の生活はみじめなものであつたらしい。その頃の歌に「自殺というを夢みてありきかなしくも浮草のごとく生きたりしかな」というのがある(早稲田文学一月号)。また創作社の社友であつた和田山蘭への書簡にも「半分は君等のために私は苦しい思ひをして(「自然」の)発行を急いだのです」などと書いている。つまりこの時雑誌「自然」の発刊は、「朱燧」に対抗する意味も含め、牧水にとっては窮余の策であつたかもしれない。

この雑誌にはそのほかにも興味深い問題が幾つかある。例えば太田喜志子の歌もその一つ。この時発表された、二〇首の歌には、牧水の突然の求婚を承諾した、二五才の娘の叙情が、色鮮やかにちりばめられている。牧水が喜志子を訪問し求婚したのは四月二日で、石川啄木の臨終にひとり立ち会つたのは四月一三日である。「自然」の二号を啄木追悼の特集にしようとした牧水だったが、結局一号を発刊したきり、二号を見ることはなかつたのだ。(治)

特別寄稿

二一つの証言 (牧水周辺展によせて)

大悟法利雄

その一 啄木の死



明治四十五年四月十三日、石川啄木の臨終の枕べに、家族のほか友人としてただ一人居合せたのが若山牧水だったことは、広く知られている。

その朝、啄木が危篤だからすぐ来てくれという節子夫人の使いに接したのは、牧水がまだ寝ている時だった。驚いて駆けつけてみると、啄木の先輩で親友の金田一京助が来ていたが、ずっと昏睡状態だった啄木の意識が戻って牧水と話をしているのを見て、これなら大丈夫だろうからちよっと帰って来ますと言った。永眠したのはそれからまもなくで、午前九時三十分だった。

他には誰もいないので、その日牧水はすぐ医者に走って死亡診断書を貰い、通知のため郵便局に行き、電報を打ち、警察、区役所、葬儀社、買物と走り廻ったが、そうしたことの得意でない牧水は、警察では叱られ、荷車には衝突するなどさんざんで、気も狂わんばかりだったという。そしてその夜の十時頃までは来ていた人たちが帰ったあと、病気の夫人

を強いて次の間に寝させた牧水は、老父と二人遺骸に付きそって夜を明かしている。

友人としてただ一人その枕べで最後の声を聞き、最後の微笑を見、老父と二人きりでほんとうの通夜をしたというのはまことに深い因縁といふべきだが、明治末期の歌壇に並んで燦然と輝やく新星だった啄木と牧水の二人は、ライバル意識などはなくて、深い親愛感で結ばれていたのである。

ところが、牧水はその十三日午前のあわただしい奔走中に啄木の死を親友に報せる一枚の葉書を書いている。これは牧水の全集にも載っているけれど、実物を見て深く注目している者は極めて少ないだろうと思われる。その一枚の葉書は、啄木と牧水についての極めて重要な資料だが、私には特別の関係があつて忘れられず、その行方が時おり気になっていたものである。

今度の「筆跡による牧水周辺展」で、啄木自身の書いた二枚の貴重な葉書と共にそれが展示されることになった機会に、私はその特別の関係と事情とをはっきり公表しておきたいと思う。

それは官製葉書で、「神田区台所町十一、中島様 方平賀財蔵様」宛で、差出人は「十三日、小石川にて 牧水」と簡単だが、郵便局の消印が極めてはっきりしているの、それによって投函したのが十一時から十二時半までの間ということが明らかである。

これは啄木永眠からまもなくで、電報を打ちに行つたついでに小石川郵便局で走り書きしたものに相違なく、九時三十分から僅か二時間前後の間に書いて出したことがわかるから、それがわかっている読めば更に興味が深くなる。

裏面の本文は次の通りである。

石川啄木君今朝九時三十分終に不帰の客となれり、枕頭には彼の父、妻、娘及び小生、寂しいとも寂しい臨終であつた。自然初号を啄木追悼号としやうぢアないか その相談もあるので、明朝僕の所へ来てくれ玉へ、もつとも論文でも書きかけてゐたならばよろしい、原田君も来るだらう、

「平賀財蔵」は中学時代からの牧水の親友春郊の本名、当時は東京帝大の学生で、もう卒業論文に取りかかる頃だった。それから文中に「原田君」とあるのは原田実で、これは早稲田大学の学生であり、二人とも牧水が第一次の「創作」を投げ出しそれに代る雑誌として企画中の「自然」の同人として名を連ねている若い相棒である。

何にしても、啄木の没後僅かに二・三時間の後に投函されているこの葉書で牧水がいち早く追悼号発行の相談をしているのを見れば、啄木についての評価と友情とがいかに大きかったかがはつきりわかる。ただ五月初めにはもう発行される雑誌創刊号を追悼

号にするのはもう時間的に無理だったので、次号を追悼号にするという予告をしているが、資金不足のために『自然』は創刊号一冊きりで廃刊され、啄木追悼号が遂に実現されなかったのはまことに惜しい。

私が初めて右の葉書を手にしたのは、昭和三年牧水没後まもなく改造社出版となった『牧水全集』編集中に平賀春郊から送られて来た牧水書簡であった。その頃私は芝愛宕下の改造社二階の図書室を事務所にして毎日通っていたが、社の囑託になっていた吉田弧羊がある日私と話に来て机上にあるその葉書を見て驚いた。弧羊は人も知る啄木研究家でその資料集めに夢中だったが、その葉書をぜひ自分に譲って欲しいという頼んで欲しいというので、私が手紙を書いて頼むと春郊はこころよく承知してくれた。ところが喜んだ吉田は、大切な一枚がまったくなくなつては平賀氏も寂しいだろうかと云つて、実物そっくりの複製をこしらえてそれを平賀に送つた。そのいきさつをよく知っているのは今では私人になつてしまった。

春郊没後同氏宛の牧水書簡は遺族から日向の牧水記念館に送られて展示されたが、それにまじつた右の葉書が実物そっくりなので、研究者にも間違えられたことなどもあつたらしい。宛人が平賀春郊であり、その葉書が日向にあるのは極めて自然だから誤認されても不思議はないが、その一枚だけは、そっくりな写しであつて、実物は吉田方にあるものだった。

その実物の葉書は吉田弧羊の没後私が一度夫人から借りて東京での牧水展に展示した事があつたが、吉田夫人も亡くなつてその後どうなつていくかわか



らないので、私は時おりそれが気になつていたわけだが、吉田弧羊の故郷盛岡に建設予定の「盛岡てがみ館準備会」に保存されているのがわかり、その好意により今度の「牧水周辺展」に展示されることになったので一安心した私は、この機会にこんな証言を書いておくことにしたのである。

その二 川端康成の書

牧水の葉書について証言をした私は、ついでにもう一つの証言を書いておきたくなつて来た。

本館の姉妹館日向の「牧水記念館」には、大きな木板に彫刻された川端康成揮毫の表札が掲げられている。

今度の「牧水周辺展」に展示される康成揮毫の大幅は、その原本となつているものだろうと思われるかも知れないけれど、それとはそっくりだがちよつと違つて、表札の原本になつたものとは別物なのである。

日向の記念館が建設されてから数年後、館では知名の人の堂々たる表札が欲しいというので相談の結果川端康成に頼みたいということになり、その交渉を引受けたのが私だった。康成がまだノーベル文学賞を受けるすこし前のことだが、文壇の巨星、普通なら相当な謝礼が必要だが、記念館にそんな余裕のないことも知つている私は康成とは親しいので、なアに無料で書いて貰いますよと言つて気軽にその

鎌倉の家を訪ねて行った。ところが、あいにく康成は不在で、夫人から用向きを訊かれて揮毫のことを話すと、そんな大きなものなど書いたこともなく、とても駄目ですよと言つた。これに断わられた。

これは直接でない駄目だと思つた私は、ちよつとその頃ある選挙の応援演説に康成の出ることを知つたので、その演説会場に行つて楽屋に待機していたのに逢い、揮毫のことを頼んだのを思い出す。

謙遜家の康成はそれを辞退したけれど、私に「ぜひにと頼むと、私ではとやつと承諾してくれただけだ。そしてそれからしば





清水町の歌碑

駿東郡清水町の南側に、富士山や狩野川の清流や箱根連山など広い眺望をもった本城山公園がある。清水町の牧水歌碑はその山裾の小高い場所に、ちょうど丘に抱かれるような感じで立っている。

地元の沼津東ロータリークラブが設立五周年の事業としてこの歌碑の建設を企画した。「この町に来た人に静岡で一番美しい富士山とそれにふさわしい歌を見せてあげたい」というのがそもその発端であった。大悟法利雄氏に相談したら、この富士の歌が選ばれたという。碑石は葦山の小松石を切り出したもので、新民朝体の文字は版画家江南兼吉氏が書

天地のこころあらはにあらはれて輝けるかも富士の高嶺は 牧水

らしく送られて来た「牧水記念館」の大書は三枚あって、この中でどれかいくらかでも気に入ったのがあったらその文字を使って欲しいという手紙が添えられていた。その三枚はどれも雄渾な文字で、較べて見るとどれもがまるで同一のもののように、まったく甲乙のつけられない出来だった。

川端という作家がその作品に鏝骨彫心の苦勞をするのは周知のことだが、私は會である小さな雑誌の題号を依頼した時に、簡単に書けそうなその題号を五六十も書いたのを送られてびっくりしたことがあったので、これだけの大きなものを三枚も書くにはよほどの数の下書きをしたに相違ないと考えてすっかり恐縮せずにはいられなかった。

ノーベル賞を受けてからの川端は無理な揮毫を頼まれることも多くなり、大きなものなども書いたことがあるかも知れないが、それ以前にはこんな大きなものなど書いたことはなかったらしいから、この



大悟法利雄

明治二十一年・大分県生れ。大正六年より作歌、牧水門下となり「創作」に入社。牧水の助手として「創作」を編集する。
主な著書「若山牧水伝」
「幾山河越えさきゆかば」

表札の揮毫は極めて珍しく、川端の代表的な筆跡として実に貴重なものである。

日向の記念館にあるのも本館にあるのもその時の一枚であることをここで明記しておく。

なおその筆跡について川端から私に宛てた手紙もあって同時に展示されるはずで、これもいろいろの解説をつけるとなかなか興味深いけれど、あまりに長くなるし、九十一歳という老齢になり病床にある私にはもうそれだけの気力もないので、ここでは以上の証言だけにとどめておく。(二月六日)



筆跡による牧水周辺展

展示期間三月末日まで
牧水が初めて登場する明治末期の歌の世界は、浪漫主義と自然主義が激しくも混合した時代である。今回の展示は、尾上柴舟や前田夕暮、北原白秋や石川啄木など、当時活躍した気鋭の歌人に光を当ててみた。遺品となった八〇点から、短歌近代の開花期の、荒々しく華麗だった一つの時代へ、遠く思いを馳せようとしたのである。

雑の歌会

平成二年三月四日(日)
沼津俱樂部

第二回「雑の歌会」は講師に「水麩」選者春日真木子さんを迎え、八〇名が参加する盛況であった。八九首の投稿歌についての講師の木目の細かい丁寧な批評が聞かれ、まれにみる充実した緊張感のみなざる歌会であった。当日は「水麩」の編集委員長高嶋健一氏と、同じく選者の橋名貞氏(湖西市)も参加、須永秀生氏の司会のもとに白熱した高レベルの批評交換もなされた。



静岡県駿東郡清水町・本城山公園 一九八五年七月一日 除幕

いた。歌碑の隣りに左記のような解説板がある。

『富士の名所清水町本城山公園に牧水歌碑を建てたいと聞いたときすぐ心に浮かんだのがこの「天地の」の一首だった。日向生れの牧水は、富士山にひかれて大正九年東京から沼津に移り、朝夕に親しくその姿を仰いで数々の名歌を残し、山麓各地に歌碑となつて立っているけれど、晩年の代表作と言うべきこの歌はまだなく、この近傍の作ではあるし、ここに立って富士を仰ぐ讃えるすべての人々にとつて、これほど共感を呼ぶ歌はまずあるまいと思うのである。(門下 大悟法利雄)』